

秋山 英治 提出 学位申請論文

『愛媛県東中予方言のアクセントと共通語のアクセント
—日本語史再建のために—』 審査要旨

論文の内容の要旨

日本語諸方言のアクセントにおいて、京都方言に関する研究がひじょうに進んでいる。京都方言に関しては、他の地域と比べて、文献資料が豊富に残されており、平安時代末頃からの文献資料や現代語による調査研究によって、史的変遷がかなり明らかになっている。ただし、室町時代以降の変遷については、不明な点もあり、高知市方言や徳島市方言など周辺部方言の調査結果をもとに、中世以降の史的変遷を考察することが多い。

中近世期の京都方言の特徴を残す地域としては、愛媛県東中予方言もあげられる。その愛媛県のアクセントについては、全国的にもひじょうに複雑な分布をするということで、アクセント研究の初期段階から注目を集め、1980年代以降、調査研究が進んでいったが、それらの多くが愛媛県南予地方に関するもので、愛媛県東中予地方に関するものは少ない。愛媛県東中予方言は、「中央式」とともに、比較的古い時代に分岐したと考えられる「讃岐式」が隣接する地域であり、また「下降式音調」などの特徴的な音調が聴かれ、日本語諸方言アクセントの史的変遷を考察する上で重要な地域であるものの、まとまった調査研究がなされていない。

本論文『愛媛県東中予方言アクセントと共通語のアクセント ―日本語史再建のために―』では、これまでまとまった調査研究がなされていない愛媛県東中予方言のアクセントについて、松山市方言を中心として、当該地域で行った調査の結果を述べるとともに、これらの成果を踏まえて行った歴史的研究の成果について述べている。さらに、愛媛県東中予方言において、急速に共通語化が進行していることから、もととなる共通語自体にどのような変化が起きているのかを明らかにするために、変化が著しいといわれる外来語をとりあげ、2種のアクセント辞典の改訂による変遷について述べている。

また、資料編として、松山市方言・松山市興居島方言・旧、北条市方言・今治市方言・国道11号線沿線地域（東温市重信町～新居浜市方言）のデータを付している。

以下、目次に沿って、本論文の概要を述べる。

【第1章 序論】

第1章では、従来、愛媛県方言がどのような方言として捉えられてきたのかを明らかにするために、方言区画に関する先行研究から、5人の方言区画案があること、また5人中3人の区画案がとくにアクセントに注目して区画案を設定していることを述べている。

さらに、第1章では、愛媛県方言のアクセントに関する先行研究を調査し、アクセント研究の初期段階から、松山市方言がとりあげられていること、1970年代までの研究では、他の都道府県と比べて、アクセントの種類が多い地域として報告されていることを述べている。1980年

代以降では、瀬戸内海島嶼部などこれまで未調査だった地点の報告がなされること、アクセント研究の初期段階でとりあげられていた松山市方言など、すでに報告されている地点の再調査が行われ、従来の研究では知られていなかった「下降式音調」など、史的変遷を考察する上で重要な特徴が指摘されるようになったことなどを述べている。

【第2章 愛媛県東中予方言アクセントの記述的研究】

第2章では、愛媛県東中予方言アクセントとして、松山市方言を中心に、松山市興居島、旧、北条市方言、今治市方言、四国中央市方言をとりあげ、調査結果を述べている。

愛媛県東中予地方一帯で、高起系列の音調に「下降式音調」が聴かれるものの、新居浜市以西では、下降式音調以外に、「高平調」なども聴かれることから、〈平進式〉が分布していること、新居浜市以东では、高起系列の音調に「下降式音調」しか聴かれないことから、〈下降式〉が分布している。一方、低起系列の音調としては、愛媛県東中予地方一帯に、いわゆる遅上がりの音調だけでなく、どこからとも決めがたい形で上昇する音調や、語頭から高く（あるいは低くもなく）始まる音調が聴かれることから、〈低接上昇式〉が分布している。このことから、香川県西部から愛媛県東中予地方にかけて連続的に、「下降式音調」と〈低接上昇式〉がセットになって分布していることが明らかになった。

各方言の特徴について示すと、次のようになる。

① 松山市方言

松山市方言では、7世代を対象に調査したところ、次のことが明

らかになった。

- (1) 品詞に関係なく、世代が若くなるに従って共通語化が進行している。
 - (2) 2・3拍名詞では、共通語志向がひじょうに強く、「疑似標準語化」やアクセント変化の一般法則に反する変化（類別体系の分裂）が起きている。共通語化がもっとも進行している2拍名詞では、若年層で共通語化が完了している。
 - (3) 動詞については、近世以降、京都方言をはじめとして京阪系諸方言で起きた、また現在起きている動詞の類推変化が、松山市方言でも同様に起きるものの、完了することなく、わずか1世代半で、共通語化にとってかわられている。
 - (4) 共通語化により、〈式〉の対立が、1950年頃生まれの話者を境に曖昧になり、1965年以降生まれの話者で完全に消失する。変化としては、有標の〈低接上昇式〉が無標の〈平進式〉に合流する形で統合する。
 - (5) 外来語アクセントについては、基本アクセント型・〈下げ核〉の位置・個々の語の揺れなど大部分において、共通語・京都方言と同じである。
- ② 松山市興居島方言

松山市興居島方言では、高年層・壮年層・若年層の3世代を対象に調査したところ、次のことが明らかになった。

- (1) 類別体系としては、松山市方言と同じく「中央式」である。

- (2) 名詞において、若年層でわずかに共通語化が確認されるものの、松山市方言と比べて共通語化は進行していない。
- (3) 高年層・壮年層の2世代に、単語単独のみではあるものの、2拍名詞第5類語を中心に、拍内下降が残存している。愛媛県東中予地方において、拍内下降が残存しているのは、松山市興居島方言だけである。
- (4) 松山市から2 kmしか離れていない、松山市のベッドタウンであるが、島という環境により、松山市方言よりも古形を多く保持している。

③ 旧、北条市方言

旧、北条市方言では、高年層を対象に、旧市内6地点で調査をしたところ、次のことが明らかになった。

- (1) 旧、北条市内6地点での地域差はなく、松山市方言と同じく「中央式」である。
- (2) 松山市方言ではほとんど聴かれなくなっている3拍名詞のH2型が残存している。
- (3) 松山市興居島方言とその内実は異なるものの、松山市方言より古形を多く保持している。

④ 今治市方言

今治市方言では、高年層を対象に調査したところ、次のことが明らかになった。

- (1) 類別体系としては、松山市方言と同じく「中央式」である。

- (2) 今治市方言においても、「下降式音調」が聴かれ、香川県西部から愛媛県東中予地方一帯にかけて連続的に「下降式音調」が分布していることが確認される。
- (3) 今治市方言の「下降式音調」は、松山市方言より下降の幅が大きく、また頻度も高い。
- (4) 旧、北条市方言と同様に、松山市方言ではほとんど聴かれなくなっている3拍名詞のH2型が残存している。また、「式保存規則」をひじょうに守っており、松山市方言より古形を多く保持している。

⑤ 四国中央市方言

四国中央市方言では、壮年層・若年層を対象に調査したところ、次のことが明らかになった。

- (1) 類別体系としては、「讃岐式」である。〈式〉は、「下降式音調」のみが聴かれる〈下降式〉と、〈低接上昇式〉である。
- (2) 名詞において、若年層でわずかに共通語化が確認されるものの、松山市方言と比べて共通語化は進行していない。
- (3) 壮年層・若年層ともに、比較的「式保村規則」をよく守っている。

【第3章 愛媛県東中予方言アクセントの歴史的研究】

第3章では、第2章の成果を踏まえ、愛媛県東中予方言アクセントに関する歴史的研究の成果を述べている。

愛媛県東中予地方にみられる「中央式」「讃岐式」の分布状況について

て、名詞とともに動詞の活用形のアクセントに注目して調査分析したところ、次のことが明らかになった。

- ① 「中央式」と「讃岐式」の境界は、従来の報告で指摘されていた新居浜市東川よりやや東にずれ、新居浜市角野新田あたりとなる。また、この境界は、類別体系だけでなく、<式>の境界ともなる。すなわち、新居浜市角野新田以西は、<平進式／低接上昇式>で、以东は<下降式／低接上昇式>である。
- ② 愛媛県東中予地方の動詞の活用形に注目すると、近世以降、京都方言をはじめとして京阪系諸方言で起きた、また起きている動詞の類推変化の過程を示すように、漸層的な分布状況を呈している。その分布状況から、従来想定されていた動詞の類推変化の過程を、さらにもう一段階細かい段階を想定する必要があることが明らかになった。
- ③ 動詞の活用形の分布状況、また東予地方で中予地方に先んじて動詞の類推変化が起きていることから、「中央式」と「讃岐式」の境界付近では、かつて「中央式」であったが、ここ100年ぐらいの間で「讃岐式」へ変化した可能性がある。

次に、類別体系として孤立的な「内輪式」である愛媛県喜多郡長浜町（現、大洲市）青島方言について、播州坂越からの移住によって島が成立したという史実を考慮し、現在の坂越方言と粗形を同じくする「中央式」（近世初期頃の京都方言）の体系から、島という隔離された環境の中で、自律的に「内輪式」に変化したという仮説をたて、その検証を行っ

た。その結果、＜式＞の変化については、音調型として上昇の仕方・語の低接性に特徴があり、無標の高起系列の＜式＞が、有標の低起系列の＜式＞に合流したという不自然な変化が起きていることから、仮説を一部修正し、松山市方言や八幡浜市方言などの周辺部方言との接触を考えざるを得ないものの、類別体系（1～3拍名詞）については、仮説の通り、島ゆえに自律的に変化した、つまり「中央式」から「内輪式」への変化が自律的に起こり得ることを証明した。

【第4章 共通語のアクセント】

第4章では、共通語にどのような変化が起きているのかを明らかにするために、変化が著しいといわれる外来語に注目し、NHK編『日本語発音アクセント辞典』および『明解日本語アクセント辞典』の2種のアクセント辞典をとりあげ、改訂による変化を調査分析した。その結果を示すと、次のようになる。

- ① 拍数別におけるアクセント型の変化は、2種の辞典ともにそれほど起きていない。
- ② 『明解日本語アクセント辞典』は、NHK編『日本語発音アクセント辞典』よりも保守的なアクセント型を重視する傾向がある。
- ③ 個々の語にみられる改訂ごとの変化は、具体的な部分は辞典による違いがあるものの、2種の辞典ともに、改訂ごとの変化の起き方が違うという点で共通している。
- ④ 個々の語の変化としては、2種の辞典ともに、平板化・1型化（頭高型化）・一語化の3つの変化が起きている。

以上要するに、本論文の目的は、アクセント研究の初期段階から注目されつつも、これまでまとまった調査研究が行われていないために、詳細が不明であった愛媛県東中予方言アクセントの全貌を解明すること、共通語化のもととなる共通語の実態を解明することにある。京都方言以外の地域では、文献がひじょうに少なく、また調査研究として簡易なものしか行われておらず、その実態自体がよくわかっていない地域も多い。その点から、本論文は、愛媛県東中予方言の実態をはじめて解明するものであるとともに、近畿・四国地方に分布する京阪系諸方言アクセントの史的変遷の考察、さらに愛媛県から広島県にかけての島嶼部に分布する東京式アクセントと京阪式アクセントの成立過程の検証において、有益な情報を供している。

論文審査の結果の要旨

学位申請論文である『愛媛県東中予方言のアクセントと共通語のアクセント－日本語史再建のために－』は、全国的にみて屈指の複雑なアクセント分布をしていることでアクセント研究の初期段階から注目されてきた愛媛県方言アクセントについて、特に東中予方言に焦点を当てた調査研究である。愛媛県アクセントは、京阪式アクセント(中央式、讃岐式)、東京式アクセント、頭高一型アクセントが分布する複雑なアクセント地域で知られている。

南予方言についてはすでにある程度まとまった調査が行われ、アクセ

ントの実態が明らかになっているにもかかわらず、特に東中予方言は、1950年～1960年代以降の調査研究が少なく、詳細なアクセントの実態がいまだ明らかにされていなかった。本研究は申請者が、当該地域のアクセントについて20年間にわたって調査研究を行ってきた集大成であり、東中予方言中心に、世代差と地域差とのアクセントの全容を明らかにするとともに、アクセント変化の過程を実証的に追究し、アクセント変化における日本語音韻史に貢献しようとするものである。

本論文は4章17節と資料編からなる。

第1章「序論」では、愛媛県方言アクセントに関する先行研究を概観し検討する。

第2章「愛媛県東中予方言のアクセントの記述的研究」では、東予、中予、南予と分けられる愛媛県方言の中で、東中予方言アクセントに焦点をあてて記述を行う。「中央式」とされる愛媛県松山市方言のアクセントを、話者を10歳きざみの7世代に分けて、それぞれ1～3拍の名詞、2～3拍の動詞とその活用形、2～3拍の形容詞の詳細な調査を実施し、さらに外来語のアクセント、駅名のアクセント、その他に松山市周辺方言のアクセント(松山市興居島<松山市よりも古いアクセントを保つ>、旧北条市、今治市、四国中央市)についても調査している。

松山市の2拍名詞のアクセントは、第1世代(1934年以前生まれ)から第3世代前半(1945年～1955年生まれ)では、「中央式」と同じ体系を保っている。しかし、第3世代後半から共通語の影響を受けたアクセントの型を示すようになり、第7世代(1985年以降生まれ)では、

類別語彙の統合の仕方と、それに属するアクセントの型がともに共通語アクセントと同じ相を示すという変化をしている。変化の過程としては、第3世代の後半から式の保存が失われ、第4世代（1955年～1964年）では、1類が平板型、残りの2. 3. 4. 5類が頭高型となる。ところが、第5世代（1965年～1974年）から第6世代（1975年～1984年生まれ）になると、2. 3. 4類の語に尾高型と頭高型が現れ、5類は頭高型のままである。2. 3類の尾高型、4類の頭高型は共通語アクセントと同じである。すなわち、第4世代では2拍名詞では、2. 3. 4. 5類が頭高型に統合したにもかかわらず、その現象は一時的で、その後、2. 3. 4類に頭高型と尾高型が現れるようになり、第7世代では共通語と同じ2. 3類が尾高型、4. 5類が頭高型になる。第1～第7世代を通じて、1類は高平型、平板型のままであるから、第4世代から第6世代までのアクセントは、類の統合の仕方とアクセントの型に共通語化した相が混在する体系となっている。

共通語アクセントへの変化の速さは品詞により異なり、動詞が一番早く次に形容詞、3拍名詞が遅れることを指摘する。

また、無人島であった島に寛永年間（1624～1645）に現在の兵庫県赤穂市から住民の移住が行われた大洲市青島の現代のアクセントを分析している。移住後、島という孤立した環境で自立的に変化したアクセントに近隣の松山市などの下降式音調が影響を与えたと解釈している。このように歴史が明らかな移住によるアクセントの変化を論じた点は、意義深い。

次に、松山市方言の四国各地の駅名のアクセントが示されている。年

代差による調査結果は興味深い。若い世代では、彼らがよく知っている駅名では式が保存され、知らない駅名は共通語と同じアクセントになっている。地域方言が、共通語化する例として示唆的な現象である。

第3章「愛媛県東中予方言アクセントの歴史的研究」では、愛媛県東中予地方には松山市のような「中央式」アクセントの他に、東予の新居浜市船木より東側に「讃岐式」アクセントが広がっていることが先行研究で知られている。この章では両タイプのアクセントを扱う。松山市から新居浜市までの11地点で類別語彙に属する名詞、動詞（五段活用と一段活用）のアクセントを調査し、「中央式」と「讃岐式」アクセントの境界が従来報告よりも東側にずれていることを明らかにした。また活用形により境界地域が漸層的な移行を示していることから、もともと中央式であった地域が、既に動詞の類推変化を起こしていた讃岐式アクセントと接触した結果によりおきた変化で、意思形・禁止形 > 終止連体形・否定形の順で変化したとしている。

異なるアクセント体系が接触したときに、漸層的な分布が生じる可能性を指摘した点、方言で進行中の変化の様相が中央語の過去の変化過程の考察に参考になるということを指摘した点は、意義深い。ただし、この地域の漸層的な分布が出来たのが「ここ100年ぐらいの間と推定される」とすると、これと系統的な「讃岐式」「中央式」の分岐とは別の問題である。この点は混乱しないよう、注意が必要である。

4章「共通語のアクセント」では、当該方言に影響を与え続けている共通語のアクセントを元に外来語のアクセントの変化を取り扱ってい

る。最後の資料編は240頁に及ぶ詳細な調査報告資料が提示されていて、貴重な資料である。

このように、丁寧な臨地調査に基づき愛媛県東中予方言のアクセントの実態を明らかにし、世代差と地域差から史的変遷と地理的接触、共通語化による変化を解明している点が本研究の優れた点である。欲をいえば、共通語化の変化過程で生じた様々なアクセントの音声的相の分析や語的な変種についての分析はもっと深められたはずであるし、変化の要因として共通語化と接触変化以外の要因、例えば自立変化や、方言独自の変化についても触れてほしかった。

しかしながら、愛媛県東予地方のアクセントの実態を明らかにし、年代差と共通語化の過程を明らかにした点は、今後のアクセント史研究に大きく貢献する論考であることは疑いなく、博士（文学）の学位に値する研究であると判断する。

平成30年12月6日

主査	國學院大學教授	久野マリ子	㊞
副査	國學院大學教授	小田勝	㊞
副査	東京大学名誉教授 國學院大學大学院兼任講師	上野善道	㊞
副査	国立国語研究所教授	木部暢子	㊞

秋山 英治 学力確認の結果の要旨

下記 4 名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、本大学院の博士課程において所定の単位を修得した者と同等以上の学力を有することを確認した。

平成 31 年 12 月 6 日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	久野マリ子	㊟
副査	國學院大學教授	小田勝	㊟
副査	東京大学名誉教授 國學院大學大学院兼任講師	上野善道	㊟
副査	国立国語研究所教授	木部暢子	㊟